研究資料

長谷寺縁起 下

宮　次　男

巻中

14 その後徳道は十五年間精進修行したが仏像造顕の願をはたすことができず、冥助を期待したところ、夢に東嶺に三燈をみ、その傍にあやしき人が居て三燈は三世の利益を表わすものである。彼嶺に霊木をひきあげて仏像をつくるべしといった。

絵は、机にもたれてまどろむ徳道と、雲上の僧形が三燈のもえる東嶺をゆび指すところを描く。

15 徳道は教えに従って、養老四年二月のはじめに霊木を東峯にひきあげ、木にむかって聖朝安穏、藤氏繁昌、乃至法界平等利益のために十一面の像を造り奉ろうと思う。大悲の弘誓我が願を感ずれば、霊木自然に仏像をなし給え、と祈願し礼拝して宣べた。同八年七月、藤原房前が大和国の斑田の勅使として来たついでに、狩のため、この峯に来ると、山中で徳道の祈願の声をきいて不思議に思った。

絵は、諸人が木を山頂にひきあげる光景と房前の一行が山麓を狩姿で行くところを描く。

『三宝絵』は、「養老四年に、今の長谷寺のみねにうつしつ。徳道力無くして、とくつくりがたし。かなしびなげきて七八年が間、此木に向て礼拝、威力自然造仏といひて、額をつく」と、聖朝、藤氏のためという願旨をのぞけば大体同じ内容のことを述べている。『七大寺年表』、『扶桑略記』、『今昔物語』『古事談』などはいずれも年代を明らかにしないが、『今昔物語』が『三宝絵』に内容的に近似する。なお養老四年の二月の年記は『建久御巡礼記』、「上表文」にはみられる。また『縁起文』は房前が長谷に来た年を「元正天皇即位六年壬戌秋七月」としている。元正天皇即位六年は養老四年庚申であって干支があわない。壬戌は養老六年に相当するから、『縁起文』は養老の年次と、天皇即位の年次を混同したものと考えられる。また、絵詞の「養老八年七月」は、実は神亀元年（二月四日改元）にあたるわけで、ここにも錯誤がみられる。なお『長谷寺霊験記』は宝字年中としてかなり時代をさげている。

16 勅使が礼拝の声をきいてあやしみ、庵の前に行って徳道に、上人は何故両家を祈るのかと問う。徳道答えていうに、第六天魔王が我が国を犯そうとした時、天照大神がこれをみて、春日明神に約束して、共に日本に天降って、自分は国主となり汝は臣家としてかの国の衆生を益そうといった。その二神の子孫として両家はこの国をおさめたが、仏法の興廃は両家にあり、また両家の運否は仏法による。したがって、此両家と仏法が繁昌すれば、衆生は利益する。そのため両家と衆生利益を願って仏像を造ろうとするのであると陳状した。房前はこれを聞いて、慶賀の事とし、助成するため朝廷に奏上して官物を下賜されるよう取計ることを約束した。

絵は、霊木を礼拝する徳道とそれをきく勅使、及び勅使と語る徳道が同図中に示される。

この天照・春日両神の説話は『縁起文』系の『長谷寺霊験記』、『三国伝記』にのみみえている。

17 房前は徳道に帰依して、神亀元年正月一日に解状を奉り、これによって同年二月二十二日（『縁起文』は二十三日とする）に勅あり、其年三月二日に宣下、同月十八日に稲三千束が下賜された。

絵は宣下をうけた国司が稲束を集荷するところ。

絵詞はこれが何天皇の時か明らかでないが、『縁起文』は房前は元正天皇に

奏上したが、程なく天皇は退位されたので、聖武天皇践祚されるや重ねて解状を勧めたとしている。また『三宝絵』は「飯高（元正）の天皇はからざるに恩をたれ、聖武房前の大臣、自ら力をくはふ」とし、『今昔物語』もこれと似るが、『七大寺年表』、『建久御巡礼記』「障子文」『諸寺建立次第』などは房前が奏聞し、勅許されたとしている。また『扶桑略記』『古事談』は両説を併記している。なお、勅許の年については、「神亀六年太政官符」、『建久御巡礼記』、『諸寺建立次第』は神亀六年としている。次段にみる御衣木加持の年月が神亀六年四月八日であり、「六」と「元」は字形が似ているから、この場合、神亀六年とする方がむしろ穏当といえよう。また、『長谷寺霊験記』の序は『縁起文』によりながら、巻上の「第二」譚にて元正天皇即位八年七月廿日（『縁起文』では房前がはじめて徳道にあった頃）に、房前は聖武天皇への譲位と、自家の繁栄を徳道に祈禱するように請い、願望成就したので、稲三千束を下賜することになったという話を加えている。また菅家本『諸寺縁起集』は「神亀三年三月廿日、天皇御悩為御祈禱、於長谷寺被造立二丈六尺十一面、則御平癒、同六月三日、為御願寺」という話を附加している。

18　神亀六年四月八日辰刻に道慈律師によって御衣木の加持が行なわれた。

絵は、材木の上に仏像の下図が描かれ、それを前にして道慈律師が加持を行っている。材木の傍にはこれを守護する持蓋童子、白衣の翁などが示されている。

『三宝絵』『今昔物語』および「徳道上表文」は御衣木加持についてはふれていないが、神亀四年に造立したと述べており、二年ばかり早くなっている。

19　同日（四月八日）から着工され、三日間で仏像を作りおわった。高さ二丈六尺で、仏師は稽文会と稽主勲の二人である。第二日目に吉窮の津麻呂という樵夫が山に入って薪をとろうとして、ふと仏所を遠望すると、稽文会は六臂の地蔵、稽主勲は六臂の不空羂索観音の姿となって、仏像を造りだしている。津麻呂はこの由を徳道に告げ、ともに仏所に行ってみれば、二人の仏師は常の人の姿であった。

絵は、六臂の不空羂索・地蔵両尊がそれぞれ木材に向って彫成する。その傍で俗形の仏師二名がそれぞれ彫成の姿で現わされ、手前の山かげから樵夫が遠望の態で示される。また向う側の山かげで樵夫と徳道が造仏の作業をみている。不空・地蔵と俗形仏師が同時にあらわされているが、これは樵夫の遠望と徳道の近い眺めを同一場面にあらわしたためである。不空・地蔵とも春日社の本地仏であるところから、特に挿入した説話であろう。他の文献にはみられないところである。なお、仏師の稽文会、稽主勲の名は『七大寺年表』『扶桑略記』（縁起文）『諸寺略記』『諸寺建立次第』はのべており、また『年表』は「金造丈六」として他書と異っている。

20　徳道は嶮難な所に堂舎を建てるので、基壇を如何にするか思いなやんでいたところ、夢に金神が現れ、北峯をさして、峯の中に金剛宝磐石があり、それをもって金剛宝師子座にするがよい。われら八部衆は連綿としてこの山を擁護してきたと告げた。

絵は、まどろむ態の徳道に雲上の童子が山をゆび指して語るところを描く。金神夢告説話は、『三宝絵』系諸書や『建久御巡礼記』、『諸寺略記』にもみえるが、八部衆らの助力についてはふれていない。

21　徳道の夢がさめた時、大暴風雨がおこって、八部衆、八大童子らが巌を掘り出していた。

絵は、風神・雷神が大いに荒れくるう下で八部衆、童子ら異形の者が大岩石を掘りおこす光景と、それを戸の間からのぞきみる徳道が描かれている。

『七大寺年表』「障子文」『扶桑略記』（縁起文）『建久御巡礼記』『諸寺略記』『諸寺建立次第』は、磐石が雷公の力で自然に出現したという霊験説話になっているが、『三宝絵』『今昔物語』『東大寺要録』「徳道上表文」は夢さめて後掘り出したことになっていて、大きく異っている。また『縁起文』は「夢覚畢時天平元年己巳歳八月十五日。及二其夜半一天風吹レ峯。龍王掣レ電大雨時降。」と、

年月日を明記している。

22 一夜あけて徳道が北の峯をみると、掌のように平坦な台地になっており、中央に方八尺の金剛宝磐があって、綾文がつけられ、菩薩の行足の穴がついている。これを新造の仏足と比較すると何ら違うことがなかった。徳道は大いに喜び、自分の誓願がかなったことを知った。

絵は台座上に安置された十一面観音像を礼拝する徳道ならびに衆人を描く。台座の寸法については諸書いずれも方八尺として一致する。磐石の綾文、足穴について『諸寺略記』『諸寺建立次第』は記述しているが、他書にはみられない。

23 ここに大会をもうけて開眼供養を行うことになったが、聖武天皇の勅命によって、大般若経一部を書写して天皇家の繁栄を祈願することが行なわれた。

絵は経を書写する僧たちと、これを供養する俗人を示す。

「徳道上表文」は大般若経供養についてのべるが、他書はこのことにふれていない。

24 天平五年五月十八日、藤原房前は勅を奉じて長谷寺に行き、同月二十日に盛大に開眼供養を行った。導師は行基、咒願は義遷で百人の僧が参加した。その時観音の頂より五色雲がわきあがり、造花に天花がまじわってまかれ、供養の夜は本尊の眉間より光が放たれて山内は金色にかがやいた。

絵は導師ら諸僧が参列して開眼供養の儀式が行なわれているところを示す。ただし本尊はここではあらわれていない。

開眼供養の日については『七大寺年表』は養老五年、『伊呂波字類抄』は養老六年とも同四年ともあいまいな記載をし、『古事談』は神亀二年三月二十一日、『東大寺要録』は神亀四年三月二十日、『扶桑略記』は神亀四年三月三十日とする。しかし、『三宝絵』が台座の上に観音像を立てたことをのべたのち「徳道道明等が天平五年にしるせる観音の縁起幷に雑記等にみへたり」と記述していることは、天平五年に開眼供養が行なわれる可能性を示唆するといえよう。

25 其夜、徳道の前に白衣の金剛童子八人があらわれて自己紹介し、徳道に自分らは此山の守護であって、国家をまもり、また此山に入る衆生を擁護して、本尊に結縁する輩を必ず導いて西方浄土に往生させることを誓うとのべた。

絵は、徳道の住坊に雲に乗って飛来した八大童子を描く。

このくだり以下は他書には収録されていない。なお、この段は長谷寺の観音の功徳、霊験を権威づけるものとして、また阿弥陀浄土の信仰を強調するものとして、長谷観音の信仰を広めるうえには、かなり重要視されてよい挿話である。

26 同二十一日に大般若経の供養があり、咒願は神叡律師、題名僧六十人であった。その夜天皇は夢に東南の方角から光がさして、御殿に入ったのをごらんになり、大そう歓喜された。

絵はつり燈籠がつられた清涼殿の一部がかすみの間に現わされ、庭前には二衛士がまどろむ態をしていて夜景であることが示されている。

27 行基は百ケ日参籠を行ったが、第七十六日の申刻に観音の右脇に忽然として金色の童子が現れ、自分は聖人に拝謁するために来た当山守護の八大童子の最末金剛使者童子である。といって、長谷の山が三世諸仏の霊場で、諸仙人修行の地であり、また日本の神々の影向した神域であることなど、この山の聖地であることをくわしく説き、台座となった金剛宝石の由来を語った。

絵は堂内で童子と相い語る行基をあらわす。

金剛宝石由来譚は「徳道上表文」、『建久御巡礼記』に古老伝云として別記している。また『諸寺略記』『帝王編年記』にも文中にふれる所がある。

巻下

28 行基は聖域をみたいと云って、童子の案内で龍穴よりはじまり悉く巡礼した。後山に至っては、童子のもつ独鈷で山頂を掘り、十六丈の水精塔の空輪と諸仏の舎利を拝した。

絵は童子に導かれて山内を巡礼する行基をあらわす。まず十一面観音像が安置された所が示される。観音の左側に八大龍王、右側に八大童子が侍し、また

左右の雲上に一対の龍王があって、左には「室生の龍王東峯に影向、今は龍高場といふ」と書入れ、右には「弓つきの龍王東(西)峯に影向　今は弓つきの尾といふ又は前山といふ」とある。また四方に四天王が配されて、この群像はまとまる。次に「(仙宮仙人経を誦て衆生の泰平を祈)」所、「日域大小諸神影向所」として岩上に異形の姿であらわされ、童子が独鈷で「水精宝塔掘出す所」と、その下方に「観音堂」が示される。次に「天照大神影向石」が鵜形の岩で描かれ、頂に一羽の烏がとまる。更に「春日大明神影向所」として沓形の岩があり、一匹の鹿が添えられている。次に「不動魔を降伏多羅尾瀧と云」う瀧がつづき、水の落下する岩に足跡が認められる。最後に、五体を地に伏せて瀧を礼拝する行基を描き、天人が空からこれを供養して「天衆大聖を供養する所　今は蓮華か峯といふ」と記入して終っている。

この段は、いわば長谷山内の聖蹟を説明するために描かれたものと解されるが、行基が童子に山内を案内されたことは『長谷寺霊験記』上第三「当寺六月十八日蓮華会始行事付捧レ花龍神捨二蛇身一生天事」にみえ、ここでは蓮華ケ峯のことや、天人が散花することなどあって、最後の絵は『霊験記』のこの記事によって描かれた感がふかい。

29　行基は此山の秘密荘厳を見たいと云ったが、童子は、これは肉眼の及ぶ所でない。聖人が両部の三昧地に入れば見られると指示した。行基がその三昧に入ると、山内みな密厳の地となり、両部の諸尊がならんでいるのを拝見することができた。見をわって行基と童子は観音の前に還ったが、童子は観音のうしろにまわって姿を消した。

絵は山を背にして現われた五仏と、禅定の姿をした行基及び童子を描く。

この条は当然行基の時代には想定できぬ内容である。諸神諸仏の垂迹の地としての長谷寺を示すためには密教の主要尊像は不可欠であったのであろう。

30　行基は百ケ日の参籠を終って本寺に還り、朝廷に仏殿の造営を奏上し、その料として白瀧一万段を申下された。又徳道は上下諸人に勧進して造営を始め、天平七年五月十六日に上棟、天裁を承って棟綱のために線糸五百両が施入された。

絵は、御所で奏上する行基、諸物資の施入の場面、及び仏堂造営の工事と上棟場面を描く。

31　堂舎の造営が完成したので、同十九年九月二十八日に落慶供養が行なわれた。請僧百人、導師は菩提上人、咒願は行基である。異香会場に満ち、天人影向して音楽を奏し、天花を散らし、衆会の人々みな奇特の思いをなした。

絵は落慶供養の光景で、舞楽が演じられている上空で天人が奏楽、散花している。

幸節本は次段の詞書を欠き、次段絵に連続する。したがって製作当初から幸節本の次段には詞書がなかったものと考えられる。

32　聖武天皇は退位後の天平勝宝四年十一月十六日に長谷寺へ臨幸、御自筆の最勝王経一部幷法華経一部を宝前に奉納された。同月十八日に大法会を開き供養す。数曲の舞楽を奏し、千人の僧を請じ導師は隆尊律師であった。

絵は、天皇臨幸の行列と長谷山内の諸堂宇が描かれている。シャトル美術館本及びパワーズ氏蔵本には詞書につづいて、この一段は、いまだ長谷寺を参詣していない人々のために描いたものであることが附記されている。いまこれらの建物や地名を画中書込みによって列記すると、

「大鳥居」「手力雄大明神」「臨幸御車」「惣門」「徳道上人廟本願院といふ」「大河大明神」「縁起勘出北野大明神今は与喜と云」「此うゑを八しほの岡といふ又は紅葉の岡と云　くれなゐの八しほの岡の紅葉はをいかに染よとなをしくるらむ」「賢璟僧都勅約を奏所」(次段の内容)「車屋とり」「二王堂」「道明大徳御廟」「花下坊又は桜本の坊とも云」「雲の梯」「雲井の坊あり」「はつせ山雲井に花のさきぬれは天の川なみたつかとそみる」「新宮也□□」(「地主瀧蔵権現」)「二本杉」「(はつせ河二本ある杉としをへて又もあひむ二もとある杉)」「気比大明神影向石」「十三重」(塔)「三社」(「四所」)「一間四面の二階堂あり」「鐘

楼」「夕霧に梢もみえす泊瀬山いりあひのかねの声はかりして」「神殿諸神勅請」（「神殿」）「観音堂」「寶護大明神影向石」「灌頂堂　後白川（河院）御願」「（護摩堂）」「御経蔵」「庫」「宝幢大明神影向石」「閻魔堂」「本長谷寺　天武天皇之御願今は本堂と云」「三重塔」（「往生院」）「奥院之惣門」「塔」「往生院」「長僧坊」

このように長谷寺の全景をパノラマ式に描き出したもので、シャトル美術館本に附記された趣旨の通りであるが、ここに挿入された和歌はいずれも勅撰集所収のもので、「くれないの……」は『新勅撰集』巻五下、内大臣（西園寺実氏）、「はつせ山雲井に花の……」は『金葉集』巻一、藤原忠隆、「はつせ河二本ある杉……」は『古今集』巻十九、紀貫之の「はつせ川ふる川のべにふたもとある杉としを経てまたもあひみむ二本ある杉」に依ったもの、「夕霧に梢もみえす泊瀬山……」は『詞花集』巻三、源兼昌の詠歌である。また、神々影向の石として、気比大明神があがっている。これを時宗の二祖他阿が砂運びをして参道を造築した敦賀の気比大神宮をさすと考えると、本縁起絵巻の製作ないし流布にあたって時宗の僧―それも勧進聖として活躍した―の存在が大きくクローズ・アップしてくる。

「弘安三年長谷寺建立秘記」（美術研究六三所載研究資料による）に「同（弘安三年三月）廿四日乙丑往生院長老過阿弥陀（仏脱カ）被定于大勧進之仁」とみえ、これが時宗僧でなくとも念仏僧である可能性は強い。また奥院は浄阿堂とも呼び、寺伝によると暦応二年（一三三九）に浄阿上人開基という。もし、これが正伝ならば、絵巻に奥院が描かれていることに関連して、絵巻の上限が限定され、しかも気比大明神影向説話も時宗側から附会されたものとする解釈が強まるであろう。現在、奥の院には新義派の開山興教大師の坐像の脇に浄阿上人の坐像が安置されているのは甚だ示唆に富む。また、『時宗闕記録』の「廿一代智蓮上人仏面帳由来之事」に、智蓮が長谷観音の頂上仏面の戸帳を布施された経緯と、その仏面帳の由来をのべたあと、「惣而彼長谷寺ノ御本尊ハ遊行ニ於テ代々不思議ノ御示現侍ルニヨリテ大鳥居ノ額ハ七祖託阿上人ノ御筆、ヨキ（与喜）ノ天神ノ額ハ十四代太空上人筆跡也、今又廿一代智蓮上人如斯誠ニ観世音遊行ニ山ゝ給ヘリ、泊瀬川ノ流ヲウケテ念仏三昧ノ洪水給ル事ナク広ハ三千世界ニオヨホシテ遠ハ三世ノ衆生ヲ沾サン事疑ナキモノヲヤ」と結んで、時宗と長谷寺との因縁浅からぬことを述べている。この文献については望月華山氏の御示教によって知り得た。御好意の程は感謝にたえない。ともかく、この段の絵は色々な問題を含んでいる。なお、『霊験記』巻上、第二「聖武天皇御一期帰二当寺一御得益事付本願上人幷始二置別当一事」に、当段にみる長谷臨幸のことがのべてあり、その内容はこの段と次段の詞書にほぼ一致する。

33　同十九日夜、天皇は御夢想あり、同十二月二十日、始めて宝帳を仏殿内にかけた。これにより永代に及んで聖朝安穏、宝祚延長、国土泰平、万民快楽を祈るべきよしを賢環僧都はうけたまはり、門徒に伝える勅約の金札を宝前におさめた。

絵は宝帳をかけて合掌する諸人。

御夢想と宝帳の関係は、詞書には明瞭にされていないが『霊験記』（前出）によると、「観音（中略）法皇に告テ云ク、濁世ノ猛キ衆生ヲ和ル事ハ、只女人ナリ、我レ此光ヲ和テ婦女ノ身ヲ現シテ、久シノ末代ニ及テ国家ヲ護シ、衆生ヲ利ント思フ、露顕ニ有テハ其憚有リ、仍テ久ク住ス可ラス、速ニ我カ身ヲ覆隠スヘシト云」という夢告により宝帳をかけたのである。したがって、この段は『霊験記』と密接に関係して成立しているといわなければならない。

34　この縁起の結びとして、長谷寺の寺地の聖域であること、また壇主聖武天皇は観音、本願徳道は法喜、開眼導師行基は文殊、堂塔供養の導師天竺菩提法師は普賢の応現であることをのべて長谷寺の権威づけを行い終っている。これには絵は附随していない。

以上、長谷寺縁起の内容とその絵画主題をのべた。内容については、すでに記述したように、他の諸縁起と異るところがある。いまその主要な点をあげて

列記すると、

①長谷寺本・後寺両者存在説は『縁起文』「障子文」のみに見える。

②徳道が父母に死別した年令を明記するのは『縁起文』「上表文」『建久御巡礼記』『諸寺建立次第』である。

③霊木流出の年の干支を丁酉とするのは『縁起文』「上表文」『建久御巡礼記』『諸寺略記』で、辛酉とするのは『三宝絵詞』（為憲記）である。

④霊木流伝説話のうち、八木門子説話は『三宝絵』『今昔』はのせず、そのかわり、両者は他にない宮丸説話をのせる。なお『縁起文』のほか流伝説話の詳細なのは「上表文」『建久御巡礼記』『諸寺建立次第』『諸寺略記』があげられる。

⑤朝廷援助については、『三宝絵』、『今昔』は宣旨が先ず下され、次に房前が助力したとし、『縁起文』『七大寺日記』「障子文」『建久御巡礼記』『諸寺建立次第』は房前の上奏によって勅許されたとし、『扶桑略記』『古事談』は両説をとる

⑥天照・春日両神の誓願は、『縁起文』『長谷寺霊験記』『三国伝記』のみにみえる。

⑦仏師名が明記されるものに『縁起文』、『七大寺年表』『扶桑略記』「上表文」『諸寺建立次第』『長谷寺霊験記』がある。

⑧台座の磐石が自然に出現したとするのは『縁起文』『七大寺年表』「障子文」『扶桑略記』『建久御巡礼記』『諸寺略記』『諸寺建立次第』で、『三宝絵』「上表文」『今昔』『東大寺要録』は掘りおこしたとする。

⑨金剛宝石（台座）の由来譚は『縁起文』「上表文」『建久御巡礼記』『諸寺略記』『帝王編年記』にみえている。

⑩大般若経供養については『縁起文』「上表文」がふれるのみである。

⑪開眼供養の日については、諸書まちまちである。

⑫堂塔建立については『縁起文』以外はふれていない。

⑬行基の山内巡礼、聖武行幸については『縁起文』のほかは『長谷寺霊験記』がふれている。

このようにみてくると、『縁起文』は「上表文」「障子文」『建久御巡礼記』『長谷寺霊験記』に類似するところが多い。また『三宝絵』『今昔物語』とは系統を異にしていることは明らかであろう。

長谷寺縁起絵巻の詞書が『縁起文』を和文化したものであることは、すでに指摘したところであるが、さらに第十三段の詞書が漢文縁起→和文縁起の関係を、和文の不明瞭な点から推定できる。したがって、『縁起文』→「絵詞」の系列は逆にはできない。一方、絵巻下巻第二十八段の長谷山内図および第三十三段の宝帳奉納が『長谷寺霊験記』と密接な関係があることから、絵巻と『霊験記』との強い結びつきが想定される。したがって、この絵巻は、『縁起文』と『霊験記』の両者の結合による所産とみなすことができるのである。

次に、絵巻全体の構成をここでふりかえってみよう。絵巻内容を大別すると、菅公勘出の由来と本長谷寺のこと、徳道上人の事蹟、十一面観音像の料材となった霊木の説話、本尊の造立、行基による霊場巡礼（長谷山内の紹介）、長谷寺造営と寺の全景がその主要画題になっている。その中でも注目されるのは、霊木にまつわる霊験説話と行基の巡歴した山内霊地で、いずれも観者の興味をそそるものである。また、上、中、下、の三巻に分ける区分の仕方が、上巻では徳道が霊木を里人からゆずり受けるところで終り、観者はこの里人に災害をもたらす木で、如何にして観音像を作るかという興味を残して巻を閉じる。それが中巻で次々と解決されてゆく。また、中巻は、行基が童子から、この長谷山内にある神・仏・仙の霊地のことをきかせられて終り、まだそれがどのような所かわからないままになっている。しかし、下巻では、それらが次々に図示されるというように、あたかも連続テレビ映画をみる思いで、観者の関心をいやがうえにも高める演出がなされている。さらに画面には「……する所」とか建物名など、その内容を説明した語句が挿入されていて、まことにわ

かりやすく構成されている。

このように、この絵巻は観者に興味を持たせながら寺の縁起を説明し、長谷寺の聖地である所以と、本尊十一面観音の霊像であることを示しているのである。

長谷寺縁起絵巻は前述したように、かなりの数が製作されているが、人心をとらえるに巧なその構成は、これが長谷本山にとどまって、参詣者に示す目的だけで製作されたとは考えられない。シャトル美術館本および、パワーズ氏蔵本の巻下第三十二段詞に附け加えられた「但此一段（絵は長谷寺全景）はいまだ長谷寺を拝せざる緇素のために、縁起以後の名所当寺の器界を交ゑて大概をかき知らしむる者也」という言葉は、この絵巻が広く諸国に持ちあるかれて、多くの人々に絵解きされながら見せられたことを如実に語るものであろう。永井義憲氏は『長谷寺霊験記』を勧進募財のための編述であると指摘されている（同氏『日本仏教文学研究』第一集所収「勧進聖と説話集」参照）が、本絵巻も、その内容と構成の人心をとらえる巧妙さからみて、勧進のために製作され、多くの本が流布したものと考えられはしないであろうか。さらに、本絵巻には、すでにふれたように、本尊の利生譚は皆無といってよく、このような縁起絵巻は他に例をみないほどであるが、その理由は、『長谷寺霊験記』と本絵巻を組合わせることによって解決されるであろう。すなわち、創建縁起をわずかにその序文にしか述べていない『霊験記』を、この絵巻は補うものであり、両者が一具となって、勧進に供せられたのではないかと推察するのである。このような観点から、本絵巻の原本は、『霊験記』が成立して、間もない頃に成立したのではないかと推測するものである。そして、現存の長谷寺縁起絵巻の殆んどが、いわゆる上手（じょうて）の作品でなく、庶民性とでもいうべき明快さと洒脱さをそなえ、時にはユーモアの表現がとられているのは、これをみる庶民大衆の親近感をいやますものであり、この種の画趣はそうした大衆を対象として製作したことを証するものといえよう。

次に、図版（前号）に掲載した作品について略解をつけ加えておこう。

徳川美術館本　一巻　紙本着色　縦三四・五糎

散逸、錯簡があって、上、中両巻を合わせて一巻としている。現存部分を現状に随って示す。（数字は通しの段次、以下同じ）

8絵、9、10、11、12、13詞、1前半絵、24末部絵、25、26、27、

詞と絵は同一紙にかかれるものが多く、その場合は墨線を引いて区画している。したがって、模写本としての性格がみられるものである。絵の描法は、本格的なやまと絵の画風を示しているが、この絵で特記すべきは描線が細くしかも柔い筆触で引かれていることである。このような筆触のものに、元亨元年（一三二一）の稚児草紙（醍醐寺蔵）、職人尽歌合絵巻（高松宮家蔵）、善信聖人絵伝（西本願寺蔵）を類似作品としてあげることができる。この繊細柔軟な描線は一四世紀中期―後期における時代様式と考えてよく、したがって、徳川本の製作もこの時期に想定するものである。長谷寺縁起絵巻中、現存最古の作品と考えられる。

幸節家蔵本　三巻　紙本着色　縦三〇・五糎

林平造氏蔵本として、国華四九三号（昭和六年十二月）に紹介されていて、長谷寺縁起絵巻中、もっとも著名である。首尾完結するが、すでにのべた通り、32詞を最初から欠いている。

絵は正統派的やまと絵様式でなく、かなり強い筆触でつけたて式に彩色する所あるが、下描きは入念で、特に人物の下描きはすぐれている。土坡の皴は墨画を思わせるところがあって印象的であり、このような画風の作品に、光明大師絵伝（光明寺蔵）ほかの浄土宗祖師絵伝（藤田美術館・久保家蔵）がみられるが、本絵巻のほうがより庶民性がつよい。また建築物は形にこだわらず、自由に変形させて描いていて、新しい観照が示されている。この様な画風の作品の製作年代を決定することはなかなか困難であるが、建徳元年（一三七〇）の玉垂宮縁

起（玉垂宮蔵）にはすでに類似の建築観照法がとられており、その後室町時代を通じて行なわれるところである。しかしこの絵巻全体を覆う画趣は、年記ある作品では、応永五年（一三九八）の光明真言功徳絵巻（明王院蔵）にあい通じるところがあって、十四世紀末葉の製作になると考えて大過ないであろう。いずれにしても、日本絵巻史上、新様式の胎動期における一作例として貴重な作品といわねばならない。

パワーズ氏蔵本　三巻　紙本着色　縦三六・八糎

かって「古美術」一五号（昭和四一年十一月）に紹介した時にはまだ日本にあったが、現在はニューヨークのジョン・パワーズ氏の所有に帰している。幸節本と画致が似るが、この方が全体に洒脱さが横溢して、人物の表情など、いかにも無邪気にあらわされ、親しさが一段と感じられるものである。その製作年代も幸節本と相前後する頃と考えてよいであろう。前述したように、この絵巻の上巻巻頭の詞書が『縁起文』の前文をそのまま用いていることは特記すべきである。現在、三巻に調巻されているが、逸脱個所がかなりあり、それをあげると3―7、9、13、14絵、17、19絵大部分、23、29、31絵、32絵、33、34の各段ということになるが但し、第9段の白蓮花谷の天人散花の絵は断簡になり個人蔵となっている。

長谷寺蔵　三巻（甲本）紙本着色　縦三一・八糎

三巻とも「長谷寺縁起」上（中・下）と内題があり、首尾完備するが、多少の錯簡が認められる。潤んだ調子の色調で、墨気が盛んで特に山水描写に目立つ。伝統的なやまと絵とやゝ異る画趣をもつが、それかといって、建物などの形は前記二作例のようにくずれてはおらず、やまと絵と水墨画とがたくみに融合して独自の様式をもつものである。また、下描きの墨線が比較的濃く、強く引かれ、樹葉など黒く塗りつぶして、それだけでも一種の完成作品（御影堂本一遍聖絵の如きもの）になる程入念である。このような様式を示す作品に熊野縁起と称されるものがあり、また、永徳元年（一三八一）の遊行縁起（遠山家蔵）や、翌二年の融通念仏縁起（知恩院蔵）はやゝ近い作風を示している。したがって、これは十四世紀末頃に行なわれた一技法とみることができよう。しかし、建物の描写や、人物の描線にやゝかたさが感じられる点は否定できず、俗形人物像のなかには、特に婦人像に新しい観照がみられ、近世絵画への近づきが窺われなくもない。一四・五世紀の交の製作と一応推定しておく。

以上、研究資料として、長谷寺縁起絵巻を提示した次第であるが、この絵の中に描写された建築物の創建問題、勧進の用具としての絵巻、さらに、長谷寺霊験記と本絵巻との関係などの諸問題を実証的に解決するまでにはいたらなかった。しかし、これらは各専門分野の研究者の協力がなくては不可能であり、いまはたゞ、資料紹介と問題提起の範囲にとどめておく。

（昭和四十五年度文部省科学研究費「総合研究」(A)の成果の一部）